
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 39

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 761. 泡沫から永遠へ
- 762. 森・井筒・辻先生から:変容の特質
- 763. 日々の習慣から
- 764. 日記という形式について得られたこと
- 765. そこに向かうために
- 766. 書くことは留まること、留まることは真実に近づくこと
- 767. グループ課題に向けて
- 768. オランダの大学院における成績評価の厳しさ
- 769. ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスを活用した実証的コーチング
- 770. 研究とコンサルティングへの充実感
- 771. 理論モデルと数式モデルを構築する面白さ
- 772. 充実感の核を突き抜けて
- 773. 留まることとアトラクター状態
- 774. 嵐と静けさ
- 775. 笑いと音楽
- 776. フローニンゲン大学のMOOCに関する研究へ向けて
- 777. 中国の思想家への関心
- 778. 「告別」「不在」「再会」
- 779. 孔子とダーウィン
- 780. 知識の体系

761. 泡沫から永遠へ

昨日は、定量データを解析することや文章を書くことが仕事の大半であったため、再び激烈に論文や専門書を読みたいという思いが煮えたぎってきた。昨夜、この炸裂しそうな思いを抑えるのが難しかったが、とにかく生活リズムを壊すことなく、そうした思いをあえて抑えることによって、その感情がさらに激しいものに変容するために、心を落ち着かせながら静かに寝室に向かった。

今朝は五時半に起床し、今日は何とことんまでに論文や専門書を読み進めていきたいと思う。現在、複数の探究項目を同時並行的に開拓しているが、私にとっては、人間の発達という一つの共通したテーマの中で探究を進めているつもりである。

実在の灯火が尽きる最後の最後まで、自らの探究課題に激しく取り組み続けたいという思いが、日ごとに強くなっていく。正直なところ、探究過程の中で自分が解体されようが、自分が溶解しようが、自分が消失しようが、もはやそれらは取るに足らないことのように思えるのだ。逆に、本質的な探究活動は、それらの特徴を持ってしかるべきだと最近強く思う。とにかく自己を焼き尽くすような熱さの中で日々の生活を形作り、焼き尽くされた自己から再創造される自己をさらにまた焼き尽くし続けるような生き方をしたい。そうした生き方を心の底から望む。

もう少しで三月を迎えようとするフローニンゲンの月曜日の朝。相変わらず早朝の七時でも辺りは闇に包まれており、気温も低い。だが、そのような中であって、書斎の窓の外で小さな声で鳴く鳥たちの存在はとても愛おしい。朝からボルトキエヴィッチの『苦難を通して栄光へ』という曲を繰り返し流している自分がある。この曲が描き出すストーリーの中の苦難に満ちた箇所がやってくると、大抵、書斎の窓の外にいる小鳥たちが励ましにも似た綺麗な鳴き声を発する。そして、その曲が栄光に至る箇所にやってくると、決まって小鳥たちは鳴き止む。

苦難の最中にいるときでも、私たちに励ます存在が確かにこの世界にいることを忘れてはならない。同時に、栄光のようなものに至ったとしても、私たちに励まし続けてくれた存在がこの世界にいたことを忘れてはならない。そして、苦難も栄光も儂く過ぎ去るものであり、私たちに励まし続ける存在は、永遠のものであるということを決して忘れてはならない。そのようなことを思わされた。

日々の生活の一つ一つの活動と行為が、全て観想的なものの中から生まれてくるようにしたい。朝の時間を取り分け貴重なものとみなしたゲーテのように、早朝は創造的行為に充てたいと思う。

ここからの30年が、50年が、80年があつという間だったという形で、これからの日々を過ごし続けたい。時間を越えようとするのではなく、時間の流れと自己が完全な合一を果たすまで、自己が消失するほどの密度を持って毎日を生きたいのである。自分の中の泡沫が永遠に到達するまで、絶えず燃焼し続けたいと思う。2017/2/20

762. 森・井筒・辻先生から:変容の特質

今日は普段と若干異なるような日だったように思う。早朝の五時半に起床して以降、いつもと変わらないような仕事をしていたのは確かである。それは学術論文を読むことであつたり、何かしらの文章を書くというものである。ただし、午前中のある時を境目に、無性に日本語を読みたくなつたのである。

私にとって、このような思いに駆り立てられることも実はそれほど珍しいことではない。以前どこかで書き留めたように、英語やオランダ語だけではなく、自分の日本語を磨き続ける必要性を痛感しているため、定期的に、持参した和書を読むということがある。実際には、日本語を磨くためというような目的ではなく、日本語を司る精神を肥やすために、森有正先生、井筒俊彦先生、辻邦生先生の文章を読むことがあるのだ。ただし、いつもは大抵、この三名のうちの一人に絞って、その人の文章を読むのだが、今日は三名全ての著作に目を通していった。

日本語で書かれた三名の文書を読みながら、そこで扱われる内容自体は異なっていたとしても、記述されている事柄が、同様の密度を持ったものとして、自分の内側に流れ込んでくるのを感じた。おそらく、彼ら三人が取り扱っている究極的なテーマというのは、多分に重なるものがあるのだろう。

三名が取り扱うテーマに対して、随分と共鳴するものが私の中にある。共鳴というよりも、強く打たれるような感覚とでも言えるだろうか。彼らの書物を読み返すと、以前読んだ箇所には下線が引かれ、私の雑感が記されていることもある。そうした箇所を改めて読んでみても、以前には見過ごしていた意味が自分の内側で立ち上がってくるのだ。

また、これまで読んだことのない箇所には、当然ながら新鮮な驚きもありながら、どこか懐かしさに似たような感覚を得たのも不思議である。この懐かしさの根源は何なのだろうか。これは自分が以前どこかでおぼろげながら考えていたことを想起するようなものと言うよりも、さらに深いところから生まれた懐かしさのように思える。もつとずっと深くにある根源的な懐かしさなのだ。

それは、全ての人間が共通して持っている経験が生まれる場所から湧き上がるような類いのものである。そのようなことを思いながら、本日もハッとさせられたのは、森有正先生が人間発達の本質を、これ以上ないほどに捉えた言葉を残していたことだった。その言葉をあえてここで記す必要はない。表面的な知識としてそれと触れたところで、全く意味が無いからである。

これまでの私は、日々の生活の中で自分の内側をかすめていくものを、貴重な価値ある存在としてみなし、それを何とか形として内側に刻み込んで行こうとしていた。これ自体は、一つの体験的な事柄が真に一つの経験となるための不可欠な実践であるように思う。だが、真の経験とは、そもそも自己展開を次々と行っていくものであり、自分自身を真に深めていくことに寄与するものなのだ。逆に言えば、自己の成熟が起こった後に、自分の内側の体験が経験になるというような特徴を、真の経験は持っているように思う。

そのため、移りゆく体験をいくら経験に昇華させようと思ったとしても、それが真の経験になるとは限らないのである。体験が経験に変容するためには、そもそも自己の変容が必要なのだ。そして、自己の変容には長大な時間がかかるため、ある体験が一つの経験になるかどうかなど、この瞬間には分かりようがないものなのだ。体験が経験になるということも、自己が発達するというのも、どちらもともに、それが真に起こったかどうかは、それが起こった後に初めてわかる類いのものなのだ。ゆえに、経験を獲得しようとする事や発達を獲得しようとする事は、相当に滑稽な願いのように思える。

2017/2/20

【追記】

欧州で生活することのできる期間がもう一年延びたことに伴い、今年の夏に、森有正先生、井筒俊彦先生、辻邦生先生の書籍を改めてじっくり読み返したいと思う。まだ読み終わっていない全集の巻があるため、まずはそれらを読み進めていく。それに合わせて、辻先生が最初にフランスに留学し

た時の日記をもう一度最初から読み返したいと思う。辻先生がパリで過ごした四年間の軌跡をもう一度辿りたいという思いが湧いてくる。

自分を真に励ましてくれるような文章は残念ながらこの世界には多くないが、辻先生の文章はまさに自分を励ましてくれるような力を秘めている。とりわけ今の私と同一年ぐらいの時期に書かれた『パリの手記』は、私の魂を支え、それをさらに深めてくれるような力を持っている。早いものでこの手記を最初に読んでから二年が経とうとしている。あの時はちょうど日本から欧州にやってくる時期だったように思う。欧州での三年目の生活を迎えるにあたり、とりわけ国外で生きた日本人の日記から私は大きな励ましと促しを得るだろう。ワルシャワ:2018/4/15(日)10:45

763. 日々の習慣から

今朝は少しばかり奇妙な夢によって起こされたと言える。夢の中身そのものに囚われるのではなく、そのシンボルが持つ意味について少しばかり考えていた。だが、夢を分析するに資するほどの知識を私は持ち合わせているわけではないため、やはり感覚的な印象を頼りにそのシンボルについて考えてしまう。その場合、無意識の底から湧き上がる豊穡な意味を持つ夢が、真に自分にとって有意味な発見をもたらしてくれないことを知る。やはり、考えを前に進めるために、知識というのは不可欠である。

寝室から書斎に移ると、辺りは静かな闇に包まれていた。英語とオランダ語の音読を終え、数年間毎朝継続している論文の筆写という毎朝の習慣的な実践を行った。ここ数週間は、ポール・ヴァン・ギアートがある専門書に寄稿した論文を筆写していたのだが、今日で無事にそれが終わり、明日からは、彼が1998年にPsychological Reviewに投稿した“A Dynamic Systems Model of Basic Developmental Mechanisms: Piaget, Vygotsky, and Beyond”を筆写することを開始しようと思う。

これは以前にも筆写したことのあるものだが、再びこれを書き写す必要性を強く感じている。

Psychological Reviewというのは、心理学の専門ジャーナルの中で、最も権威あるものの一つであることもあり、この論文も非常に中身が濃い。カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論の原型を成した1980年の論文“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills”も、Psychological Reviewに投稿されたものであり、こちらの論文の密度も傑出している。この論文に関しては、時間をかけて二度ほど筆写をしていたように思う。二人が論文の中

で展開する論理構造や語彙の選択などをこの数年間丹念に追っていたため、論文執筆の技術に関して、彼ら二人に負うことは大変多い。

明日からは、単にヴァン・ギアートの論文を筆写するのではなく、当然ながら分析的にそれを行いたい。具体的には、どのような内容がどのような語彙で表現されているかだけでなく、論文全体の構成から始まり、一つ一つのセンテンスや語彙がなぜそこに置かれる必要があるのかといったところまでを含めて、慎重に文章を書き写していきたい。彼ら二人が見ていた世界と築き上げた体系は、私にとって遥か先にあるのだが、徐々にそれらに近づきつつあるのを確かに感じている。これは私にとって、一つ喜ばしいことである。

朝の習慣的な実践を終えると、真っ暗な闇の向こうから、青黒い空が姿を現し始めた。ホロヴィッツ編曲の『死の舞踏』が部屋に流れ、空の青黒さと共に、それは私を内面の深くへと向かわせる。今の私にとって、このピアノ曲は不思議な力を持っていると思う。ここからさらに時間が経つと、青黒さから薄青い空に変わり、今日は晴れとのことであるから、冬に固有の静かで引き込むような青い空が広がることを期待している。いずれにせよ、時間の変化に応じて変化するのは、空の色でしかない。空は常にそこにあり続けているという認識を持つことが大切だ。2017/2/21

764. 日記という形式について得られたこと

今日の午前中は、発達のプロセスを研究する意味と方法に関する論文を数本ほど読みたい。その後、今取り掛かっている研究で活用する予定の「状態空間分析」に関する専門書“State Space Grids: Depicting Dynamics Across Development (2013)”を読み進めていきたい。

それにしても昨日は、改めて森有正先生から大きな励ましを得たように思う。いったい私は、森先生から何回励ましを受ければいいのか分からないほどであるが、それが他者を通じて生きていくことの意味だろう。私が生まれる前にお亡くなりになられた森先生から、現在の私が大きな励ましを得るということ自体、不思議なことであり、とても尊いことであるように思う。

改めて励ましを得たことは、論文という体裁ではなく、日記という体裁から思想体系を構築していくことの可能性についてであった。昨日は、森先生の書籍をいくつか横断的に目を通していたのだが、『デカルトとパスカル』という書籍と『城門のかたわらにて』という書籍では、全く文体が異なることに

気づいた。前者が学術論文のような文体で展開されているのに対し、後者は日記のような文体で展開されている。前者の書籍は、森先生がフランスに渡られる前の作品であり、後者は渡仏後の作品である。

『城門のかたわらにて』のみならず、先生がパリに渡れてからの作品は、ほとんどが日記の形式であると言っても良いかもしれない。日記の体裁をとりながらも、これほどまでに深い探究活動ができるのだということに驚かされるのである。いや、逆に日記の体裁をとるからこそ、深い内面探究が可能になるのかもしれないと思わされたのである。

以前、ドイツの文学作家であるミヒャエル・エンデの父、エドガー・エンデが残した言葉について言及していたように思う。エドガー・エンデは、概念というものをイメージが殺されたものだという主張をしていた。これに対して、私は賛成票と反対票の双方を入れていたように思う。その時は、特に反対票に関する考えを書き残していたと思われる。

賛成票に関して言えば、森先生の『デカルトとパスカル』という書籍は、間違いなく深く鋭い探究がそこでなされているように思う。だが、そこでの文章はとても概念的な匂いが漂っているのである。それは不快な匂いではなく、ある種の香気なのだが、展開されている内容をこちらの全身に引きつけて咀嚼することが非常に難しい。つまり、この書籍で読者に要求されているのは、概念によって殺されたイメージや感覚を、こちら側からの積極的な働きかけによって再び生命を吹き込むような作業なのだ。正直なところ、この作業は至難の技である。

それに対して、森先生が日記という文体で執筆された一連の作品は、イメージや感覚を含めて、先生の実存性がその中に色濃く生きている。まさに、そうした生きた実存性を保ち得る可能性が日記という形式にあるような気がしているし、そうした生命を感じさせる何かが、昨日の私を確かに動かしたのだと思う。日記という形式については、今後また何かを書き留めておく必要があるだろう。それぐらいに私は、日記が持つ不思議な力に恩恵を受けているのだ。2017/2/21

【追記】

この日記で書かれているように、私は日記の持つ力に目覚めさせられた。今も異国の地で、日々の足取りを日記として書き留めている。それは旅先であっても関係ない。実際に、今私はこの追記を

ワルシャワで書いている。日記を執筆しながら日々自らの学びと存在そのものを深めていく実践は、学術論文や書籍を執筆すること以上の意義を持っている。日々を記すということ、自らの人生を記すということのさらなる意味が徐々に開けてくるかのようだ。ワルシャワ:2018/4/15(日)16:46

765. そこに向かうために

今日はとても暖かい一日であった。このような暖かさを感じると、春がやってくる日もあと少しだと実感させてくれる。午前中の仕事が終わると、春を予感させる暖かさを感じながら、近くのノーダープ ラントソン公園へランニングに出かけた。ランニングから帰ってくると、昨日から考えていた言葉の問題について、再び少しばかり考えることを強いられた。

このように、毎日何かしらの日記を書き残していると、ある言葉を使う必要がなくなるほどその言葉を紡ぎ出す必要があると思わされる。誰しも皆、関心テーマというものは異なっており、それは日々の変化に応じて移り変わるという性質を持っている一方で、そのテーマは変わらずに自分の内側で成熟の歩みを進めているという特徴も持っている。

後者に関して、一つのテーマに長らく留まり、そこからいったん離れ、再びそのテーマに戻ってきた時に、以前自分が用いていた言葉がもはや通用しなくなるような経験をしたことはないだろうか。仮に自分自身の内面の成熟が進行していたのであれば、再び同じテーマに戻ってきた時に、もはや以前の言葉を使うことなどできなくなると思うのだ。なぜなら、新たに辿り着いた内面世界からそのテーマを眺めた時に、もはや以前とは異なる見方や感覚が生じ、それにふさわしい言葉というのは、新たな内面世界から生み出されるものだからである。そこではもはや、以前の内面世界から発せられた言葉を活用できるような事態ではなく、必然的に新たな言葉を生み出さざるをえないのだ。

今の私がこのように毎日何かしらの言葉を紡ぎ出しているのは、その言葉をもはや使う必要がないほどに自分の内側にそれを刻印し、そこから離れようとしていることの表れかもしれない。そして、そこから再び同じテーマに戻ってくることを望みながら、新たな言葉を生み出す準備を日々行っているような気がしてならない。

こうした日々の足取りを見るにつけ、人間の発達について私が何かを語る資格など、まだ一切ないのだということを改めて感じさせられている。公共に資する形で人間の発達について語ることが許さ

れるのは、人間の発達に関する自らの知識や経験が、普遍的な次元にまで昇華されてからだと思うのだ。そこに到達していない段階で紡ぎ出される言葉は、常に余分な贅肉がつきまとっているかのように、小さな自己の残滓によって濁されたものなのだと思う。だが、それを承知で何かを語ろうとしなければ、一生何かを語るなどできないのだということを知る。

以前、自己の未熟さを晒しながらでも、自分の言葉を絶えず紡ぎ出していくことの決意を表明していたように思う。本当にそれをしなければ、自分の仕事は小さな自己の内側で完結したものに成り果ててしまうだろう。結果として、そうした仕事は、この世界に関与するという、人間がなす仕事の本質を骨抜きにしたような、無用の長物に過ぎないものになってしまうに違いない。そのような仕事に意味を見出すことができないのは私だけだろうか。

そのような生き方に意味を見出すことができないのは私だけだろうか。絶望的なまでに希望を持って自分の仕事がしたいという強い思いが湧き上がってくる。同時に、絶望的なまでに希望を持って自分の人生を生きながら、この世界に関与したいという思いも湧き上がってくる。これらの気持ちを抑えることなど、今の私には到底不可能な話である。2017/2/21

766. 書くことは留まること、留まることは真実に近づくこと

—すべて急ぎゆくものは、たちまちに過ぎる。とどまるもののみ、私たちを真実の世界に導く—リルケ

今日は午後から、「状態空間分析」に関する専門書を読んでいた。この分析手法は、現在取り組んでいる私の研究の中で重要な役割を果たす。具体的には、この手法は一つのダイナミックシステム——一つに限定されず、より多くのシステムを勘案することも可能——を構成する複数の要素が、状態空間の中でどのような挙動を見せるのかを可視的に掴むためのものである。

例えば、教師と生徒との間における行動を一つのダイナミックシステムと見なし、状態空間の縦軸に教師の行動を取り、横軸に生徒の行動を取ると、教師と生徒の振る舞いが、やり取りの推移に応じてどのように変化しているのかを捉えることができる。この手法に関する専門書を読み進めながら、実際に専用のソフトウェアをあれこれと試していた。「複雑性と人間発達」というコースのクラスを通じ

て、このソフトウェアを活用したことがあったのだが、その時は与えられたデータセットに対して実習を行っていた。

今回は自分のデータに対してこの分析手法を活用しようと思っていたのだが、データファイルの作成方法が正しくなかったらしく、うまくこのソフトウェアを活用することができなかった。実習の際に用いたデータファイルの形を参考にして、自分のデータからデータファイルを作成しようとしていたのだが、どうもうまくいかなかった。この点については、状態空間分析に精通しているサスキア・クネン先生に、月曜日のミーティングの際に助言を求めようと思う。

夕方から夜にかけて、現在執筆中である論文の理論的説明をする箇所に修正・追加を施していた。10ページを超す文章に対して、一つ一つの章の中における段落の整合性や章と章とのつながり、さらには語彙の密度についても一つ一つ確認しながら加筆修正を施していった。この作業がひと段落し、手を止めて書斎の窓から空を眺めると、日が沈むのが幾分伸びていることに気づいた。すると突然、書くことは、対象の中に深く留まることを意味するのではないか、と思ったのだ。

内面世界を対象にした内省的な文章を書くことによって、徐々に内側の真実が明らかにされていくのも、外面世界を対象にした科学的な文章を書くことによって徐々に外側の真実が明らかにされていくのも、書くという行為の本質の中には、留まるという現象が不可避に存在しており、留まることによって初めて、対象が真実を語り始めるのではないかと思ったのだ。

これは残念ながら、話し言葉にはないような力のように思える。話し言葉には、対象の深くへ私たちを導く力が弱く、刻印性という特性が乏しいように思える。話し言葉は、たちまちに私たちの中を過ぎ去っていくような類いのものであり、よほど注意深く話し言葉を用いなければ、私たちは対象の中に長く留まることはできないように思える—経験上、ボームダイアログやダイヤモンドアプローチなどの内省的な対話技法を用いるのであれば話は別である。

一方、書き言葉には、一文一文の中に留まりながら進むという特徴があることが見えてくる。書くという行為は、ある思考・感情・感覚に焦点を当て、一文一文の中に留まりながら、対象の中に徐々に徐々に深く入り込んでいくことを可能にする。そして、それによって初めて、対象物は徐々に内包す

る真実を開示するのである。確かに、自分自身の体験からも、ある対象に焦点を当て、何かしらの文章を書く際には、その奥へ奥へと沈んでいく感覚がある。

それがまさに、対象の中に留まるということを意味するのだろう。同時に、対象の中に留まる最中、私という存在は自己の内側の深くに留まることも意味しているように思えてならない。これは内面の成熟を促す際にも、ある知識体系や技術体系を構築する際にも、非常に大切なことのように思える。内側に留まり、対象に留まらなければ、開けぬ境地が確かに存在するのだ。

移りゆくものと共に移り行ってはならない。自己や対象というものは、本質的に移りゆくものなのだが、あえてその中に果敢に留まることをしなければ、私たちは何も掴むことができないだろう。対象に留まることを可能にし、自分自身の中に留まることを可能にしてくれるのが、書くという行為の本質の一つであるということに気付いて嬉しく思う。書くという行為を通じて私たちは、対象と自己が開示する真実を徐々に目撃することになるに違いない。2017/2/21

【追記】

ワルシャワ国立美術館を先ほど訪れた時のことを少し思い出していた。この日記で書かれているように、「果たして先ほどの自分はどれほど一つの芸術作品の内側に留まっていたのだろうか？」という問いが立ったのだ。美術館を訪れることによって、芸術作品を消費対象とみなしてはいなかったのだろうか？そんな問いも立つ。

この日記を読みながら、もう一度対象及び自己の内側深くに留まるということを意識しなければならぬということをおぼされた。いついかなる瞬間も私たちは対象及び自己の深くに留まることができる。なぜなら対象世界と内面世界は、いついかなる時でもその深遠な世界を開示して私たちを待っているからである。ワルシャワ:2018/4/15(日)16:57

767. グループ課題に向けて

燦然と輝く太陽を拝むことのできる崖から、広大な海を見渡すことができ、眼下には薄黒い雲が散逸しているのを目撃した。そのような夢を昨夜見た。その場所は、どうやら南アフリカにある喜望峰

だということが夢の続きから分かった。喜望峰からインドに向けて列車で北上しようとしていた夢は、一体何を暗示しているのだろうか。

今日は朝から雨が静かに降り注ぎ、少しばかり激しい風が吹いている。昨日は随分と、書くということをテーマに考えを促されていたように思う。書くというテーマの中に留まり、書くという行為に留まったおかげか、書くということの真実にまた少し近づけたように思う。

今日は午前中に、エスター・セレンとリンダ・スミス の名著“A Dynamic Systems Approach to the Development of Cognition and Action (1994)”を読み進めたいと思う。この書籍は、ダイナミックシステムアプローチ(DSA)の研究手法に関して細かな説明をしていないのだが、理論的な説明が豊富に盛り込まれており、DSAを発達研究に適用する者にとってバイブルのような存在の専門書である。私も過去に一読をしたのだが、今回改めて腰を据えながら再読をしたいと思うに至った。今日から数週間をめどに、この書籍をじっくりと読み解いていきたい。

本書をある程度読み進めることができれば、来週の月曜日に控えたクネン先生とのミーティングに向けて、その場で何をディスカッションするかを決めておこうと思う。おそらく最初に、私の論文の理論的説明の箇所に対する、先生からのフィードバックがあるだろう。その後、教師と学習者の行動を分析するコーディングマニュアルについて意見交換をし、状態空間分析を活用するためのデータファイルの作成方法について質問することになるだろう。

クネン先生とのミーティングに向けた準備が終われば、「創造性と組織のイノベーション」というコースで課されたグループワーク課題に取り組みたい。今学期は、履修しているもう一つのコース「複雑性とタレントディベロップメント」の方でもグループワーク課題が課せられているため、他の学生との共同作業を強いられることが何かと多い。実際に、今日の午後からは、「複雑性とタレントディベロップメント」におけるグループワーク課題を一緒に取り組むことになった、インドネシア人のタタとミーティングをする予定になっている。そのミーティングの前に、前者のグループワーク課題に着手しておこうと思う。

この課題の趣旨は、研究大学としてのフローニンゲン大学が、どのようにすればより創造的な研究を行うことができるのかということについて、簡単な現状分析を行い、分析結果と先行研究をもとに

した提案を行うというものである。このアプローチは、イノベーションを創出することに課題を抱える企業に対するコンサルティングと全く同じである。今回私が一緒に取り組むことになったメンバーは他に三名がおり、ルクセンブルク人のヤン、ドイツ人のマーヴィン、オランダ人のリサである。

先週第一回目のグループミーティングを行った時に、特にヤンの出身国であるルクセンブルクについて関心があったため、あれこれと彼に質問をしていた。国土の小ささの話から、物価の高さ、そして言語についての話題に及んだ。ルクセンブルクという国について私はほとんど知らなかったため、ヤンの話はどれも面白かったのだが、特にルクセンブルクの言語事情には驚かされた。ヤン曰く、ルクセンブルクの公用語はフランス語とドイツ語であり、公用語ではないがルクセンブルク語を国民は話すことができるとのことである。

そして、大半の国民は英語を流暢に話すことができるため、実質上、四つの言語を話すことができるそうだ。私からしてみると、いかにそれらの言語に共通点があるとはいえ、四つの言語を流暢に話すことは至難の技であると思える。そこから、ルクセンブルクがどのような言語教育を行っているのかについて関心が湧いてきた。

初回のミーティングでは、お互いを知るという要素が強かったが、次回のミーティングに向けて取り組むべき課題を明確にした。私たちのグループは特に、前回のクラスの中で簡単に言及された、創造性を養うトレーニングに着目をしているため、フローニンゲン大学が研究者に施しているトレーニングの現状を調査することになった。同時に、研究に力を入れている世界の一流校が、創造性を養うためにどのような種類のトレーニングを博士課程の者や研究者に提供しているのかを調べることになった。それに付随して、創造性を涵養するトレーニングやワークショップの効果に関する先行研究を集めることにした。今日の昼食前か昼食後に、先行研究の調査を進め、それをグループに共有しておきたいと思う。2017/2/22

768. オランダの大学院における成績評価の厳しさ

以前から少し気になっていたのだが、なぜオランダの大学において退学率が高いのかがわかったような気がした。詳しい統計データは覚えていないのだが、確か日本の大学の中途退学率は、数パーセントからせいぜい一割だったように思う。一方、オランダの大学においては、その率が三割

に到達する。オランダの大学は、基本的に学費は極めて安く、経済的な理由で退学をするというよりも、大学で要求される学術レベルについていくことができず、単位を取得できないということが大きな理由になっているらしい。

フローニンゲン大学に所属してみて、私もこの事情を痛切に感じている。本当に単位の取得が容易ではないのだ。幸いにして、これまでの学期の中で単位を取得できなかったことはないのだが、当初想定していたのとは大きく違う状況に今の私は置かれている。

フローニンゲン大学に来る前に、0から10の成績尺度のうち、平均が9以上であれば「最優等 (summa cum laude)」が授与され、平均が8以上であれば「優等 (cum laude)」が授与される形で卒業することができるということを聞いていた。私は、四年前に米国の大学院へ留学したのと同じような気持ちでフローニンゲン大学に進学していたため、当初は8以上の成績を収めることは簡単であろうと高を括っていた。実際に各コースの試験を受け、成績結果が開示されるたびに、8以上の成績を取得することは非常に難しいことに気づかされる。

これまでの私の成績は、7が最高であり、前回のコースでは6の成績が付された。そもそも、日本の大学に進学した時から、試験で好成績を取ることができない特性を自分は持っていることに気づかされていた。逆に、米国の大学院で経験したように、自分が取り上げたいと思うテーマについて、自由にペーパーを書くという形式の方が高い評価を自分は受けるということを知っていた。そのため、試験を課してくるフローニンゲン大学で、良い成績が収められていないことはそれほど驚くに値しない。

だが、それにしても成績評価が大変厳しく、単位取得が困難であるというオランダの大学事情を突きつけられたような気がしている。一方で、さらに興味深いのは、このように単位取得が難しいにもかかわらず、フローニンゲン大学の学生たちは、さらに厳しい成績評価を求めているようなのだ。

一週間ほど前、大学から送られてきたメールを見ると、それは学生が大学を評価するレポートであり、「試験をもっと難しいものにしてくれ」という要求が学生から多々あったそうだ。学生側の意識も非常に高く、少しばかり感心させられた。

現在履修中の「複雑性とタレントディベロップメント」というコースの中で、グループワークを共にしているドイツ人のフランは、フローニンゲン大学の学部から上がってきたばかりにもかかわらず、心理学的な発想や研究手法に関して随分と鍛えられているという印象を私に与えた。その背景には、単位取得の厳しいコースワークを学部時代に三年間—オランダの学士プログラムは基本的に三年間—にわたって継続させてきたことがあるのだろうと思った。

フローニンゲン大学でのこれまでの私の成績はあまり良いものではなく、今後博士課程へ進学する可能性を考えると、悠長なことは言っていられない。実際にここ数日間、研究者としての今後を少しばかり考えていた。今の私は、研究のみならず、知性発達科学の知見を活用したコンサルティングやコーチングの実務にも携わっており、そちらの活動を今後も継続していきたいと思っている。同時に、人間の発達をより深く探究するためにも、博士課程へ進学したいという思いも持っている。

理想としては、足を踏み入れておきたい専門分野があと少しあるため、それらに関する修士号を二、三取得してから博士課程へ進学したいと考えている。今のところ、米国の大学院かフローニンゲン大学で博士号を取得したいという思いが強くなる。フローニンゲン大学で博士号を取得する可能性の目を潰さないためにも、コースワークの成績があまり良いものではなかったとしても、とにかく査読付き論文を今年の間に一、二本執筆するという、今の自分にできることを着実にやりたい。2017/2/22

769. ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスを活用した実証的コーチング

午前中の仕事を終え、昼食を済ませてひと休憩入ってから、「複雑性とタレントディベロップメント」というコースと一緒にグループワークを行うことになったインドネシア人のタタとキャンパス内のカフェでミーティングをするために、自宅を後にした。

今日は少しばかり風の強い日であるが、寒さはそれほど厳しくなく、フローニンゲンの街にも春の予感が漂い始めている。偶然ながら、カフェの入り口の前でタタと鉢合わせ、簡単に挨拶を済ませてから席を確保した。少しばかり雑談をしてから本題に移った。今回取り組む課題は、発達のプロセスを観察することが目的となっている。

前の学期にタタはコーチングのコースを履修しており、私も発達支援コーチングの実務に携わっているという都合上、今回の課題ではコーチングを題材にすることにした。コースを担当するマライン・ヴァン・ダイク教授の話によると、昨年のテーマには、子供がチェロを学ぶ過程や赤ちゃんが歩行能力を獲得するプロセス、さらには大人がウォールクライミングを行うプロセスを観察したものとことだ。

タタと私は、コーチ役とクライアント役を交互に行い、それぞれ30分ぐらいのセッションを録画・録音し、そこでの発達プロセスを観察することにした。私から提案したのは、コーチとクライアントの行動パターンを分類し、それがセッションの推移によってどのように変化するかを見るというものである。ただし、これはカテゴリーデータであるため、一つ一つのカテゴリーに数値を振って、会話のターンの推移に沿ってそれらの変化を追ってみたところで、発達プロセスを明らかにすることは難しいという議論になった。

もちろん、ダイナミックシステムアプローチの手法である「状態空間分析」や非線形ダイナミクスの手法である「フラクタル尺度解析」などを適用すれば、それらのカテゴリーデータから発達プロセスを可視化することは十分に可能である。だが、今回の課題でそれらの手法を活用することは、幾分手の込んだものであると私も思い、このアイデアを採用しないことにした。二つの目のアイデアは、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用し、コーチとクライアントの会話をスキルレベルの観点から分析していくというものである。

もし私一人でこの課題に取り組めるのであれば、この案を採用したいところだが、二人でコーディングマニュアルを一から作成するのは手間がかかる上、私がフィッシャーのレベル尺度のそれぞれをタタに教えなければならないという手間もある。そのため、結局こちらのアイデアもあまり望ましくないことがわかった。するとタタから、例えば、コーチがクライアントの話をどれだけ理解しているのかを0から10で評価し、クライアントがコーチのことをどれだけ信頼しているのかを0から10で評価するのはどうか、というアイデアを出してもらった。

それを聞いた瞬間に、このアイデアは面白く、データの取得や分析も容易であると思った。伝統的な発達科学のアプローチではなく、今回は発達のマイクロなプロセスを追いかけるプロセスリサーチを行うことが課題の主目的であるため、セッションの前後に理解度と信頼度を図るのはいけない。そ

のため、会話のターンに応じて、逐一コーチはクライアントが述べたことを理解しているかを直感的に0から10の尺度で評価し、クライアントはコーチの質問を受けた際に—もしくは、質問に答えた際に—コーチをその瞬間にどれだけ信頼しているのかを0から10で自己評価していく必要がある。

もちろん、実際のコーチングセッションでは、コーチやクライアントは、このように逐一お互いを何らかの尺度で評価していたとしても、それをメモするということはないだろう。ただし、「クライアントの今の回答はあまり理解できなかった」「その回答はとてもよく理解できた」という評価を、コーチは頭の中で無意識的に行っているだろう。

また、クライアント側も、「今の質問はどのような意図があったのだろうか。このコーチは自分のことをあまり分かってきていないのかもしれない」「その質問はこれまでの自分にはない視点が含まれており、私の話をよく分かった上で投げかけてくれたものだろう。このコーチは信頼できる」というような評価を無意識的にセッションの中で行っているだろう。

今回は、会話のターンに応じて、手元に用意した分析表に瞬時に数値を書き込んでいくというアプローチを採用しようと思う。そのようにして収集されたデータに対して、まずは単純にコーチの理解度とクライアントの信頼度に関するグラフを描き、それぞれが会話のターンに応じてどのような推移で変化しているのかを見てみようと思う。その後、お互いの関係性を把握するために、理解度と信頼度に関するグラフが示すであろう変動性を、フラクタル尺度解析を活用することによってパターン化してみるのも面白いかもしれない。

あるいは、本日のクラスでも言及があり、現在の私の研究でも活用している「交差再帰定量化解析」を用いることによって、コーチの理解度とクライアントの信頼度がどれほどの度合いでお互いにシンクロナイゼーションを起こしているのかを分析してみるのも面白いだろう。

ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法を用いて、実証的にコーチングプロセスを研究した論文を執筆しようと思っていたところだったので、今回の課題はその論文の執筆に向けた良い準備になるだろう。2017/2/22

今朝、久しぶりに、以前オランダ語と一緒に履修していた中国人の友人であるシェンから連絡があった。シェンは言語学科の修士課程に所属し、欧州の幾つかの言語体系を研究している。そのシェンから、親切にも夕食の誘いがあった。以前から、中華料理と一緒に食べようという話をしていたのであるが、なかなかお互いの日程が合わずにいた。幸いにも、今週の金曜日はお互いに都合が良く、シェンの自宅で夕食を共にすることにした。

その日は午前中から、フローニンゲン大学が無料で提供するオンラインコース(MOOC)の撮影が行われているザーニクキャンパスに足を運び、これまでのコースに関するデータを見せてもらうことになっている。フローニンゲン大学のMOOCを統括するディエナム教授と先日ミーティングを行い、現在の課題について話を聞いていた。私は、MOOCに関してダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法を活用した研究を純粋に行おうと思っていたのだが、ディエナム教授から、研究かつコンサルティングのようなものを合わせて行って欲しいという依頼を受けた。

ディエナム教授曰く、フローニンゲン大学のMOOCに関わるチームは、大量のデータに対してどのような角度からどのような分析手法でアプローチしていけばいいのかを悩んでいるようで、研究成果をより良いMOOCの実現に向けてどのように取り入れていけばいいのかについて、多くの課題を抱えているようであった。私としても、科学的な研究手法を駆使しながらコンサルティング活動に従事できることほど意義を感じるものはないので、ディエナム教授を含め、フローニンゲン大学のMOOCに関わるチームと協働できることを嬉しく思う。

相変わらず形而上学全般を含め、哲学や思想に触れることは、私に大きな喜びをもたらすが、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの世界に足を踏み入れれば踏み入れるほど、科学が私にもたらす喜びも増している。世界的に名門と呼ばれるコンサルティング会社が、科学的な手法に精通した多くの博士号取得者を抱えているということに対して、その納得性が私の中でより増している。

理系的な発想や科学的な探究アプローチがコンサルティングに求められる発想やアプローチと非常に似ているということに加え、単純に、特定分野における科学的な手法に精通している博士号取

得者は、それらの手法をある現象に適用することによって、独自の真実を照らし出すことができるという強みを持っているように思われる。

正直なところ、それが人財開発コンサルティングであれ、成長支援コーチングであれ、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを学ぶ前の私は、発達現象に関する多くのことに盲目的だったと思うのだ。それはなぜなら、それまでの私は基本的に、既存の発達心理学の枠組みだけを持って発達現象を捉えていたからであり、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを活用することによって初めて明かされる、より精密な発達プロセスやメカニズムを見落としていたからである。

まさにちょうど、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを駆使しながら、これまで自分が携わってきた実務内容を実証的に検証したいと思っていたところだった。その一環として、MOOCというオンライン学習に関するコンサルティングに対してダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを適用することができるというのは、願ってもない依頼だったのだ。

自宅の書斎にこもりながら文書を読むことと書くことは、非常に大きな充実感を私にもたらすが、読むことと書くことを通じて獲得された知識と技術を、研究とコンサルティングに活用することができるというのは、何にも代えがたい充実感を私にもたらす。専門書や論文を読むことと文書を書くこと、研究とコンサルティング、そして何より、生きることそのものが全て結びついた日々を過ごすことができ、至福さの中に溶け込んでしまいそうである。2017/2/22

771. 理論モデルと数式モデルを構築する面白さ

今日は夕方から、「複雑性とタレントディベロップメント」というコースの第三回目のクラスに参加した。このコースを担当しているのは、マライン・ヴァン・ダイク教授とラルフ・コックス教授であり、毎回のクラスを通じて、二人からは多くのことを学ばせてもらっている。毎回のクラスでは最初の一時間は二人の教授からのレクチャー、その次の一時間はグループワーク、そして最後の一時間は各グループに対して一人の教授が丁寧なフィードバックを提供してくれるという構成になっている。

今日のクラスでは、特にグループワークの課題が非常に面白い内容であった。言葉を獲得して少しばかり時間が経った三歳ぐらいの子供とその母親のやり取りを録画したものを観察し、二人のやり

取りをダイナミックシステムアプローチの観点から分析するというものである。最初に課せられたのは、録画の中で展開される二人の会話に対して、最初の一分半ほどのやり取りを文字に書き起こすことであった。書き起こされたトランスクリプトに対して、一つの単語を発している行動、二つか三つの言葉を発している行動、四つ以上の言葉を発している行動、という三つのコードを当てはめていった。

そこから、その子供が母親とのやり取りを通じてどのように言語を発達させていくかの理論モデルを構築することを行った。具体的には、それら三つのコードを、その子供が獲得する言語体系というシステムの構成要素とみなし、それら三つの構成要素間の関係を把握することが最初のステップであった。例えば、一つの単語を発する行動は、二つの単語を発するための前提条件となり、一つの単語を使えば使えるようになるほど、徐々に一つ一つの単語を組み合わせ、二つの単語を発することができるようになる。

そのため、一つの単語を発する行動は、二つの単語を発する行動に正の影響を及ぼしうる。一方、二つの単語を組み合わせ発することができるようになってくれば、それぞれの言葉を別々に発することは減少していくと考えられる—例えば、“I cry”というセンテンスを言えるようになると、“I”と“cry”を一語で用いることは減少する—。つまり、二つの単語を組み合わせることができる行動が増えれば増えるほど、一般的には一つの単語を発する行動は減少していく。ゆえに、二つの単語を発する行動は、一つの単語を発する行動に負の影響を及ぼしうる。

もちろん、私たち成人でも、“Yes”や“Yeah”という一単語を発することがあるため、一つの単語を発する下限値というものを想定しなければならない。特に知性や能力は、このように複数の要因が相互に影響を与え合っており、一方向的な因果関係を考えるてはならないのだ。

実際のグループワークでは、このように三つの要素の相互作用を考慮に入れて、理論モデルを構築し、それを数式モデルに変換していった。今回は、ダイナミックシステムアプローチの数式の中で最も基本的な「ロジスティック方程式」を活用し、数式モデルを組み立て、それを実証データと照らし合わせながらコンピューターシミュレーションを実施した。その結果、私たちが構築した理論モデルが組み入れられた数式が示す三つの要素の発達プロセスは、実証データが示す形と非常に似通っていることがわかった。グループワーク後に、ヴァン・ダイク教授からもフィードバックがあったが、私たちはどうやら、筋の良い理論モデルを立てることができたようである。

今回のグループワークを通じて、改めて、システムの構成要素間の関係性を考察して理論モデルを構築することの面白さと、そこから数式モデルに変換し、コンピューターシミュレーションを実施する醍醐味を味わうことができた。今後の研究やコンサルティングを見据えて、日々の生活の中で目にするダイナミックシステムに対して、その構成要素を分析し、暫定的な理論モデルをその場で即座に構築するという訓練を自らに課していきたい。2017/2/22

772. 充実感の核を突き抜けて

ここ数日間、夢の中で何か重要なテーマについて考え続け、とても大切な閃きを得ているような気がしてならない。だが、夢という性質上、そこで得られた閃きを自分なりに捉えておかないと、足早にどこかへ去ってしまう。とはいえ、夢の中で考え続けているテーマを顕在意識のもとに蘇らせ、夢の中で浮上してきた閃きを捉えるというのは容易なことではない。そのため、今の私は、夢の中で考えていたテーマやそこで得られた閃きを強引に顕在意識下に晒すのではなく、あえてそれらを無意識の中にしまいながら、機が熟するのを待とうという心構えでいる。

それにしても、ここ数日間において、自分の無意識の中で本質的な意味において何が起こっているのかとても気になる場所である。ハッと目覚めるという言葉がふさわしいほどに、この数日間はハッとした気づきと共に目覚めることが続いている。私の内側では、また何か新しい展開が着実に起こっているようだ。

そういえば一週間ほど前に、フローニンゲンでの生活も七ヶ月が過ぎ、三月からは八ヶ月目の日々を送ることになる、とふと思った。この七ヶ月間は、これまでの人生の中で最も充実していた期間だと言っても間違い無いだろう。充実感という感情の最奥に入り、充実感という感情が持つ根源的な粒子を通じて日々を過ごすことができ始めている。そうした日々の生活が可能になったのも、ひとえに、自分なりの充実感の形というものをこれまで考え続け、充実感を外から捕まえようとするのではなく、充実感と一体になりながら生きるにはどうしたらいいのかを考え続けていたからであろう。

そのような意味で、この七ヶ月間は、自分固有の充実感の意味を掘り起こし、姿を現した充実感の核と同一化することを試み、それが現実のものとなっているような期間であった。ここから私は、さらに先へ進みたいと思う。今の私は、充実感の核を突き抜けることが可能だという確信めいたものを

持っている。各人固有の充実感の核を発見し、それと同一化するというのは、まだ道半ばでしかない。

とめどなく溢れる充実感を生み出す核と一体化した先には、その核を突き破り、別次元の充実感が無限に流れ出すに違いないという確信があるのだ。今私が感じている充実感を感じる必要がないところまで、充実感を深めていくことが大切である。これは何も、充実感に拘泥することやそれに麻痺することではない。それらとは全く意味が異なり、今の私には想像もできないような質感を持った別次元の充実感に至ることを意味している。

私はいよいよ日本へ戻れなくなってきた。今の私にとって、日本に生活拠点を置いて日々を形作ることがもはや想像できないものになり始めている。その場所でしか感じられないことや考えられないことがあるのは歴然としており、その場所でしか深められないことがあるということも、紛れもない事実として私に迫ってくる。今の私が得ようとしていることや深めようとしていることは、やはり日本にはないのだと思う。

今この瞬間において、この場所でしか得られないことや深められないことを極限まで追求し、次に進む日が来ることを願う。そうした日々を送り続けていけば、いつか母国で生活をする日がやってくるかもしれないからだ。2017/2/23

【追記】

やはり欧州はそうやすやすと私が次の場所に行くことを許さなかった。欧州での生活は二年ではなく、少なくとも三年に及ぶことになった。欧州に捕まった自分が今ここにいる。素直な気持ちとして、私はもう一度米国に戻って探究活動を深めていく必要性を今も感じている。今年の秋から予定していた米国行きの話は立ち消えとなり、必然的に私は欧州にもう一年残ることになった。もちろん、三年目の欧州での生活が終わったところで米国に戻れるかどうかは保証されていない。その時の身の振り方はその時になって考える。

私はいつもプランBを用意しない。プランAがダメになった時に、また新しいプランAを考えればいいという発想でこれまで生きてきたし、これからもそのように生きていこう。とりあえず、今のプランA

は欧州にもう一年残ることである。そこではこの二年間の欧州での学びを一段高い次元でまとめ上げるような試みに着手したいと思う。ワルシャワ:2018/4/15(日)17:30

773. 留まることとアトラクター状態

昨日は普段に比べて、幾分多くの日記を書き留めていた。朝と夕方の二回に文章を書くということが習慣になっており、それ以外の時間帯においても、文章を書き留めておきたいという思いが自発的に湧き上がってきたら、その都度文章を書くようにしている。

昨日は内側から促されるように文章を書き残していたように思う。とりわけ大きな出来事があったようには思えないのだが、なぜだか文章を書き留めておきたいという強い促しがあったのだ。昨日の「複雑性とタレントディベロップメント」のクラスにおいて、オランダ語ではなく英語を用いるグループワークに従事している最中に、改めてメンバー四人の視点や考え方が多様であることに気づかされた。

私の勧誘によってオランダ語グループではなく英語グループの方に参加してくれることになったオランダ人のピーターと、ドイツ人のフラン、インドネシア人のタタ、日本人の私は、それぞれに違った感性や思考を通じてこの世界を生きているのだということが、グループワーク中の何気ないやり取りからはっきりと掴めたように思う。

ここに私は各人の固有性を見た気がした。これは何も、国籍が異なることから生まれる固有性ではなく、もっと根本的な固有性である。それは、一人の人間が独自に持つ固有性だと言えるだろう。その人だけが持つ生の一回性から生み出される、真の固有性と表現してもいいかもしれない。そうした真の固有性が、私たち一人一人の人間には備わっている気がしてならなかったのだ。そこからふと思ったのは、やはり自分の考えや感覚から出発することの大切さである。

私たちはどうして自分の考えや感覚から出発することをためらうのだろうか。自分の考えや感覚というのは、その人の固有性から生み出されたものであるがゆえに、自分の考えや感覚から出発しないことは、自分の固有性を殺していることに等しいのではないかとすら思う。自分の考えや感覚を探り、そこから出発をするというのは、自己耽溺とは全く異なるものである。それは自己に溺れるどころか、自己から解放される道を歩み出すことに等しい。

以前にも言及したように、自己の考えや感覚というのは固有性を帯びたものなのだが、そこから出発し、それを突き詰めていくと普遍性に至るのだと私は考えている。そのため、自己の考えや感覚から出発するというのは、自己陶醉に浸ることでもなければ、自閉的になることでもない。全く逆である。それは徹底して、小さな自己からの解放へ向けて歩み出すことに他ならない。

自分の考えや感覚を一つ一つの固有の命であるとみなし、それを殺さずに育み続けることが大事である。それによって初めて、考えや感覚の純化が始まり、それがいつか普遍性の境地に至るのだと思う。昨日のグループワークでの何気ないやり取りから、そのようなことを考えさせられた。

今日の午前中は、昨日の午前中と同様に、エスター・セレンとリンダ・スミスが執筆した名著“A Dynamic Systems Approach to the Development of Cognition and Action (1994)”を読み進めていた。第三章を読んでいる時にふと、先日書き留めていた「留まること」に関する新しい意味が見えてきた。

そもそも、私たち人間のようなダイナミックシステムは、必ず何かしらのアトラクター状態を好む傾向がある。私たちの知性や能力においても全く同じであり、それをさらに小さなダイナミックシステムとみなした場合、必ず何かしらの安定的な状態を好むのだ。アトラクターに関して以前にも紹介したように、それは全く動きがない静的な状態ではない。むしろ、そうした静的な状態を生み出すために、当のシステムは動的に運動を続けているのだ。

そのため、こうしたアトラクター状態のことを「動的安定性」と呼ぶという点を紹介していたように思う。まさに、私たち自身、そして知性や能力というのは、一つの動的安定性を十分に経験することによって、また別の動的安定性を獲得していくという特徴を持っているのだ。このように、一つのアトラクター状態に留まり、そこからあるとき突如として別のアトラクター状態に移行するというのが、私たちの発達の本質に備わっている。この点に着目したとき、やはり私は、留まることというのは非常に大切な現象であると思ったのだ。

実際には、一生抜け出ることのできないアトラクター状態も存在していると思うが、私はあえてそうしたアトラクター状態でさえも肯定的なものとみなし、仮にそれに捕まることになったとしても、そうしたアトラクター状態が持つ無限の深さから帰還したいと思う。今の私は、成長や発達を遂げること、変

化するということ、移行するということよりも、そこに深く留まることに固有の価値を見出しているようだ。留まることとアトラクター状態という現象には、まだまだ隠された真実がありそうである。2017/2/23

【追記】

この日記を読みながら、欧州で三年目の月日を過ごすことになったのは、もしかすると何かが私をここに留まらせるように仕向けた結果によるものなのかもしれないと思った。この日記が指摘しているように、留まることの中に固有の価値があるのであれば、私は喜んで欧州にもう一年留まりたいと思う。欧州に留まることの中にまた新たな真実を見つけ出し、いこうとする意思を強くしたい。欧州から米国にやすやすと移行するのではなく、この土地に留まるということ。それがきっと私の人生には必要であり、必然だったのだ。その遥か先に、母国に帰る日が待っていると信じている。ワルシャワ:2018/4/15(日)17:40

774. 嵐と静けさ

早朝から雨に見舞われ、台風のような風が吹きすさぶ一日だった。今日は「創造性と組織のイノベーション」というクラスに参加するために、社会科学キャンパスへ行く必要があったのだが、豪風の中に雨が混じる天候には苦勞をさせられた。実際のところ、オランダに来て初めてこのような天候に見舞われた。三月が近づいてきたためか、気温が少しずつ春を予感させるものになっているのはとても有り難く感じていた。

その矢先に、今日のような天候がやってきたのだ。そこでふと、天気をダイナミックシステムと見立てた以前の日記を思い出した。天気をダイナミックシステムと見なせば、冬から春に移行するというのは、システムの状態が大きく変化することを意味する。システムがある状態から次の状態へ移行する特に直前において、変動性が激しくなると言われているが、まさにその特徴を示すような現象を本日目の当たりにしたような気がした。

このような大きな変動性を確認したことによって、改めて春が近くに迫ってきていることを感じる。新しい季節がいよいよやってくる。新たな季節を迎える時に、私の中でまた何か新しい芽生えがあるだろうか。そのようなことに少しばかり期待をしている自分がいる。

これは時折自分にやってくる現象なのだが、今日は自分の内側の奥の方に留まっておきたいというような気分であった。あまり積極的に人と話す気力が湧かず、自分の内側の中で静かにしておきたいというような状態であった。そのような状態に置かれていたため、「創造性と組織のイノベーション」の今日のクラスにおいて、時に発言をすることもなかった。クラスの後、このコースで課せられているグループ課題について、リサ、マーヴィン、ヤンとグループミーティングを行っていたのだが、その時には幾分気分が好転し、彼らと意見交換をすることができた。

天気と同様に、人間の心理状態というのは、紛れもなくダイナミックシステムだということを改めて実感する。明日は朝一番に、自宅から歩いて30分ほどかかるザーニクキャンパスを訪れ、フローニンゲン大学が提供するMOOCのデータを見せてもらうことになっている。フローニンゲン大学のMOOCを統括するディエナム教授の計らいによって、MOOCチームのメンバーと顔を合わせ、すでに得られたデータに対して、今後どのような研究ができるのかを話し合う機会が得られたのだ。

どのようなデータがどれほどあるのか、今から楽しみにしている。今年の九月から「実証的教育学」のプログラムに在籍することを希望しており、そこではMOOCに関する研究を行いたいと思う。明日のミーティングはまさに、半年後から始まる新たなプログラムでの研究に向けた、非常に重要な準備になるだろう。このミーティングが終われば、中国人の友人であるシェンと夕食を共にする予定となっている。窓の外の激しい風とは対照的に、今の私の心の中はやけに静かだ。2017/2/23

775. 笑いと音楽

昨日の夜は少し疲労感を抱えていたが、十分な睡眠のおかげで、今朝は再び気力に満ちた状態に戻ったように思う。気分や体調を含め、人間は変動性に満ち溢れた存在だということを改めて知る。

一昨日に引き続き、昨夜も夢の中で何やら考えさせられることがあった。昨夜の夢の中では、笑いという現象と音楽が私たちにもたらす作用について考えていた。夢の中で、ある出来事の説明がなぜ笑いを人々の中に引き起こすのかについて、個人の内面領域の観点と集合の内面領域の観点から説明している自分がいたのである。夢の中での自分の説明を詳細に覚えていないのだが、笑いというのは主観的な側面のみならず、たぶん人間主観的な側面を含んでいるということを述べて

いたように記憶している。なぜ夢の中で自分が笑いについて熱心に説明をしていたのかは定かではないが、笑いについて考えさせる契機のようなものが昨日の出来事の中にあったように思う。

昨日参加した「創造性と組織のイノベーション」というコースを担当するエリック・リーツシエル教授の特徴を端的に述べると、創造性や組織のイノベーションに関する学術研究に造詣が深いというのは言うまでもなく、何よりもユーモアのセンスに溢れている。それも皮肉なユーモアではなく、自然と笑いが出ざるをえないような類いのユーモアなのだ。昨日のクラスも、リーツシエル教授は冒頭からユーモアに溢れる言葉を発していた。

昨日の日記で書き留めていたように、昨日は自分の内側の奥深くに留まっておきたいという気分であり、講義内容にはそれほど集中していなかったのであるが、リーツシエル教授のユーモアの生成方法にだけは比較的多くの注意を払っていたように思う。リーツシエル教授が発するユーモアをよくよく観察してみると、一つには、あらかじめ意図的に仕込まれたユーモアがあるということに気づいた。これはリーツシエル教授が、講義資料を作成する過程で、講義内容に照らし合わせて事前にユーモアを考案しておくというものである。

もう一つには、即興的な形で生み出されるユーモアがあることに気づく。こちらは、刻一刻と変化する状況に適応する形で、ユーモアを発することが要求されるため、より柔軟性と適応力が必要とされるようなものだと思う。即興的な形でユーモアが溢れるというのは、天性のものかもしれない。だが、ユーモアというのは先天的なものだけではなく、一つ目のユーモアの特徴のように、緻密な準備によって意図的に生み出せるものでもあるのだ。

教室内の反応や私の内側の反応を見る限りでは、意図的に生み出されたユーモアも、即興的に生み出されたユーモアも、どちらも質的に大きな差はなかったように思えた。そのため、私はユーモアの分類を超えて、ユーモアがどのように笑いの形となって私たちに届くのかについて考えていたのである。あるいは、笑いのメカニズムや法則性について非常に気になっている自分が存在していたのである。もちろん、それらについて深く考えるようなことをしようと思っていたわけではなく、何となくそれらが気掛かりな状態に自分はいたのだ。そうした状態を引きずっていたがゆえに、夢の中で笑いというものが一つのテーマとして浮上してきたのかもしれない。

二つ目のテーマである、音楽が私たちにもたらす作用についても、このところ自分の中でなんとなく気になっていたものである。音楽には、ある特定の情感を引き起こし、さらには特定の心象イメージを喚起する作用があることは間違いないだろう。実際に昨日も、内側に沈み込もうとするような気分の際に、エリック・サティのピアノ曲は、内側に沈み込む私の感情をさらに強化し、少しばかり不気味かつ神秘的な心象イメージを引き起こすことに気づいた。

そこからドビュッシーのピアノ曲に切り替えたところ、内側に沈み込む気分が幾分軽やかになり、より多様な色を伴った明るい印象イメージに変わったのである。人間の心は、一つのダイナミックシステムであり、激しい変動性を持っている。

絶えず環境や文脈と相互作用するこの開かれたシステムは、ある特定の情感や心象イメージを喚起する音楽によって、変幻自在に変化するということを目の当たりにしたように思う。今この瞬間にも、グレン・グールドが演奏するモーツァルトのピアノ曲が流れており、自分の心が何やら洗われるような気がしている。今日もまた、音楽とともに日々を形作っていこうと思う。2017/2/24

【追記】

欧米での生活も丸六年が経とうとしており、もしかすると私は良い意味で欧米人のように、些細なユーモアに対しても笑いを隠さずに外側に出すようになってきているように思う。昔から私はよく笑う人間であり、日記や音楽が私の人生に不可欠なのと同じぐらいに笑いというものも私の人生には不可欠である。

正直なところ、日常の至る所で様々な事柄に対して私はよく笑っている。笑いを引き起こすものは本当に無数の出来事であるため、あえてそれらを具体例として一つ一つ紹介しないが、共通点として、私は何かこれまで気づけなかったことに気づかせられた時必ず笑いが出るようである。ちょっとした驚きが伴う時には常に笑っていると言ってもいいかもしれない。

今日もワルシャワの街で生活をする中で、何回も笑っていたように思う。明日もきっと笑いに満ちた一日になるだろう。そして、私の人生においてこれからも笑いが絶えることはないだろう。なぜなら、私の日々は気づきと驚きで絶えず満たされているからである。ワルシャワの街で私は今、人生を生

きることの喜びを噛み締めている。明日も明後日も、私は今日のように生きて行く。ワルシャワ:2018/
4/15(日)20:30

776. フローニンゲン大学のMOOCに関する研究へ向けて

昨夜の台風のような一日が嘘のように、今日は良い天気にも恵まれた。今日は午前中から、フローニンゲン大学が提供するMOOCを通じて得られたデータを見せてもらうために、自宅から徒歩で30分ほど離れたザーニクキャンパスに足を運んだ。

昨日は、雨が混じった激しい風の吹く一日であり、それを象徴するように、自宅からザーニクキャンパスの道なりには、風で折れた枝が散在していた。散在した枝を脇目に、暖かな太陽を感じながら、目的地に向かった。ザーニクキャンパスはいつも何らかのコースの最終試験が行われる場所でもあり、何度か足を運んだことがあるのだが、今日のミーティングが行われる場所は初めて訪れた。建物の外見や中の作りは、私がいつも利用している社会科学キャンパスよりも新しい印象を私に与えた。

MOOCを統括するディエナム教授に指定されたミーティングルームに到着した時、ちょうど廊下の向こうからディエナム教授がやって来るのが見えた。簡単に挨拶を交わし、まずはディエナム教授の研究室で話をするようになった。話によると、ディエナム教授は社会科学キャンパスとザーニクキャンパスの両方にオフィスを持っているとのことであった。ディエナム教授のオフィスに入って荷物を降ろした時に、ボウマ博士という、フローニンゲン大学のMOOCを担当している別の研究者が部屋に入ってきた。

ディエナム教授が私たちのコーヒーを作りに行ってくれている間、ボウマ博士と少しばかり雑談をしていた。なにやら、ボウマ博士は、修士課程は生物学を専攻しており、博士課程は精神医学を専攻していたそうである。興味深い研究遍歴だったので、もう少し詳しく話を聞いてみると、精神科医のような臨床的な側面ではなく、生物学の観点を強調した研究を行うことによって、精神医学の博士号を取得したようだ。そこからさらに研究者としての方向転換があり、現在はフローニンゲン大学のMOOCに関する研究やサポートに従事しているとのことであった。

ディナム教授がコーヒーを作ってきてくれた後、私たちは三人で、MOOCに関する研究の可能性について少しばかり話をしていた。今日のミーティングの趣旨は、まさに、どのような種類のデータがあるのかを見せてもらうことによって、私が研究アイデアをいくつか生み出し、その中からお互いのニーズに合致するものを選び、それを実際の研究として具現化させていくことにあった。ボウマ博士がデータの概要について説明を始めて少し経った頃に、もう一人、別の女性が部屋に入ってきた。その女性はシャーロットという名前であり、彼女は神経科学の修士課程に所属しているとのことであった。

シャーロットは、一つの目の修士課程で認知科学やAIを学び、現在の専攻は二つ目の修士課程であるという説明をしてくれた。心理学を専攻していた学部時代に、Rを用いたデータ解析のコースや、他のプログラミング言語(C+やC++)に関するコースを通じて獲得したデータ解析能力を買われ、シャーロットは修士課程での勉強に加えて、MOOCに関するデータアナリストとしての仕事に週一度ほど従事しているそうだ。

前回のディナム教授とのミーティングでも話に聞いていたように、フローニンゲン大学のMOOCチームには大量のデータはあるものの、それをどのように分析したら良いのかについて問題を抱えている。近年のデータ解析で主流となっているRに精通したシャーロットのような存在は、貴重な人物なのだろう。シャーロットが加わってからは、四人で意見交換を始めた。ディエナム教授の隣の部屋が、ちょうどシャーロットがデータ解析の作業をしている部屋とのことであり、ボウマ博士と共に、その部屋でMOOCの実際のデータを見せてもらった。

私の中では、MOOCの大量なデータに対して、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス的手法を活用したいという明確な考えがあった。ただし、それらを活用するためには、十分な時系列データが必要であり、実際にデータの形式をしてみるまでは、具体的にどのような研究ができるかが定かではなかった。実際にデータを見せてもらうと、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを適用することができると瞬間的にわかった。あとはどのようなリサーチクエスチョンを立てるかが重要になる。

これはディエナム教授やボウマ博士も述べていたことなのだが、単に現象を説明するような記述的な研究ではなく、現象の分析から実務的なインプリケーションが引き出せるような研究を行って欲し

いという要望を受けた。そのため、例えば、受講生が途中でコースからドロップアウトする要因を、提供するコンテンツの内容や構造から分析することや、最後までコースを継続させた受講生は、そのコースを通じてどれほど知識やスキルを獲得できたのかを測定し、学習成長率が高いコースの特徴は何なのかを明らかにすることなどが考えられる。

ただし、これらの二つの案はどちらも、構造的発達心理学の枠組みを活用することになるであろうから、すでに入手済みのデータをさらに別の観点から分析し、新たなデータを生み出すことが必要である。そのため、それらは、データを整理するのに少しばかり時間と労力を要することになりそうだ。それらのテーマは面白いと思うのだが、まずはできれば、既存のデータに対してダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを活用し、そこから実務的なインプリケーションを引き出すことのできる研究を行いたい。

そうすると、例えば、次のような案が考えられる。フローニンゲン大学が提供している通常のMOOCは、一つのコースが六週間で完成する構成になっている。毎週のコースは、およそ25個ぐらいの学習ステップで構成されている。学習ステップとは、例えば、(1)ビデオレクチャー、(2)クイズ、(3)受講生同士のディスカッション、(4)リフレクション、(5)講義内容の補足資料など、合計で10個ほどの種類が様々な組み合わせによって構成されたものである。

これは私の仮説であるが、どのような学習ステップの流れでカリキュラムを構成するかによって、受講生がすぐに飽きてしまうことが起こったり、逆に受講生を強く引きつけたままの状態を維持することができるのではないかと思う。想像するに、毎週のコースに25個の学習ステップがあるのであれば、それがどのような変動性の波を持っているのかを分析し、例えば、バッハの音楽のように心地良い波を持つピンクノイズを発している週は、学習者のドロップアウト率が低かったり、逆に安定的すぎる波を持つブラウンノイズを発している場合には、受講生はカリキュラムの流れに単調さを無意識的に感じ、ドロップアウト率が高くなることが起こり得るかもしれない。

もちろん、これを一つのコースに対して行うだけでは他の要因からの影響を強く受け、一般化ができないので、フローニンゲン大学が提供する10個ほどのMOOCに対して分析をし、統計的な分析手法を活用したい。より個別具体的に、例えば、どのようなビデオレクチャーが学習者を強く惹きつけるのか、という点に絞って分析を試みるのも一つの案としてある。エスター博士曰く、受講生が

最後までビデオを視聴したかどうかに関するデータもあるとのことなので、レクチャーの内容というよりも、レクチャーの難易度—複雑性—という観点に焦点を当て、それと最後までビデオを視聴したかどうかの関係性を見ていくことも面白そうだ。

この場合には、ビデオレクチャーのトランスクリプトに対して、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用し、一つ一つのビデオの意味段落ごとに複雑性を分析し、個別スコアを算出すると共に、一つのビデオの平均複雑性を算出し、どのタイミングで受講生が視聴を中断しているのかを分析してみるというのも一案である。

さらには、最後までコースを完了させた受講生の中で、最後の課題で高い得点を得た受講生と低い得点を得た受講生とでは、コースの最中における学習プロセスにどのような違いがあるのかを調査するというのも、個人的には面白いと感じている。正直なところ、研究をしてみたいテーマがこの他にも無数にある。今日は全てを書き留めておくことができなかったので、明日の朝に再度アイデアを書き留めておきたいと思う。2017/2/24

777. 中国の思想家への関心

昨夜は、中国人の友人であるシェンの自宅で夕食を共にした。オランダ語のコースと一緒に受講した時から、シェンとは仲が良く、彼は非常に親しみやすいパーソナリティーを持っている。有り難いことに、シェンが中華料理を振る舞ってくれるとのことであり、シェンと久しぶりに会って話をしたいという気持ちもあったため、夕食の招待を断る理由などなかった。シェンが住んでいるのは、フローニンゲン大学のメインキャンパスの近くにある学生寮である。

この学生寮は面白い作りになっており、半分が観光客用のホテルになっており、もう半分が留学生用の学生寮になっている。私はその国際寮に向かって夕方に自宅を出た。その道中、ある地点に差し掛かったところで、フローニンゲンの街の象徴でもあるマルティーニ塔が見えた。早朝とはまた異なる、爽やかな夕方の空を背景にしたマルティーニ塔がいつもとは異った印象を私に与えた。

それは厳かにそこにたたずむという印象ではなく、静かにそこにたたずむという印象であった。その印象を受けた時、私は少しばかり今後の自分の生活について考えていた。直感的に、当初の計画よりも長くこの街にいるのも悪くないのではないか、という思いが湧いてきたのだ。具体的には、九

月から在籍する予定の「実証的教育学」というプログラムが終了した後、すぐにアメリカに戻るのではなく、もう一年間ほどリサーチアシスタントとしてフローニンゲン大学で働くのも選択肢として悪くないと思ったのだ。

私と同じプログラムに在籍するインドネシア人のタタから話を聞くと、プログラム終了後もオランダに残る手段の一つとして、米国の大学院で言うところのOPTのような制度があるらしいのだ。私も米国の大学院を修了した時に、このOPTという制度を活用した。これは一般的に、修士課程か博士課程を修了した留学生は、卒業後に一年間ほど就労許可を与えられるというものである。タタ曰く、これと似た様な制度がオランダにもあるとのことである。

「タレントディベロップメントと創造性」「実証的教育学」の二つのプログラムが修了した後に、再び米国の大学院にすぐさま戻るのではなく、二年間の学びを咀嚼するような期間を一年ほど設けてみるのも良いのかもしれないと考えるようになっていく。その一年の期間でさらに探究を深め、自分の研究や日本の企業との仕事を継続させていきたいと思うようになった。それを実現するためには、フルタイムでオランダの大学でリサーチアシスタントとして働くよりも、可能であればパートタイムとして働きたい。

タタから教えて貰ったこの制度が、フルタイムのみならず、パートタイムにも適用されるのかどうかを確認しておきたい。そのようなことを考えながらシェンが住む国際寮に到着した。時間通りにシェンが出迎えてくれ、私たちは夕食を共にした。シェンから中国の教育や文化などについてあれこれと話を聞き、お互いの現在の研究内容や今後の進路について話をしていると、当初の予定よりも随分と長居をしてしまった。

シェンから聞いた話の中で、いくつかさらに考えを深めたいものや非常に面白い話があったので、それらをまたどこかで書き留めておきたい。とても有り難いと思ったのは、私が中国の代表的な思想家の哲学を学びたいと伝えたところ、ちょうどシェンが春に中国に一時帰国するので、その時に、私が特に好きな思想家である孔子、老子、荘子の原著を購入してくれるとのことであった。夕食後に、シェンから中国の詩について色々話を聞いていると、改めて詩というものに関心を強く持つようになった。孔子が編纂したと言われている『詩経』も中国から持ち帰ってくれることになり、それを元に詩というものに関する探究を少しずつ着手してみたいと思う。2017/2/25

【追記】

シェンはプログラム終了後にフィンランドの大学の博士課程に進学することを考えていたようだったが、結局母国の中国に戻った。あれからシェンは元気にやっているだろうか。シェンからもらった中国語の思想書は今も大事に本棚の中にある。まだ腰を据えて読めていないのが残念だが、いつかこの書籍が必要になる日が来るだろう。

この日記で執筆している通り、私はもう一年オランダで暮らすことにした。この日記を読みながら、フローニンゲンでもう一年過ごしたいという思いが改めて強くなった。「アムステルダムやロッテルダムに引っ越すのではなく、フローニンゲンにもう一年残ろう」と決心した。ただし、ここで書かれているようにフローニンゲン大学で研究員として働くことはしない。フルタイムはおろか、パートタイムでも働かない。もう組織に雇われることは極力したくないのだ。研究インターンの際には贅沢にも研究室が支給され、自分の好きなように研究を進められたのは確かである。

だが、オフィスに勤務する諸々の時間が惜しく、またオフィスの中で他人と共に過ごすことが私にはどうも合わないようだ。日本で働いていた時も、米国で働いていた時も同じ気づきを得ており、結局オランダでも同じことに気づいているため、やはり私は組織の中で、いやそもそもオフィスの中で仕事ができない人間なのだろう。フローニンゲンで過ごす三年目は、組織に所属することなく、自分の探究をとことんまで前に進めていく。組織に属しては決して不可能なことを欧州での三年目に実現させようと思う。ワルシャワ:2018/4/15(日)20:54

778. 「告別」「不在」「再会」

昨日から連続した日だったように思えるような一日だった。同時に、昨日から非連続的な日だったように思えるような一日だった。

一昨日の就寝前に私の身に降りかかった、切断からの消滅と、消滅からの再生という体験について、また新しい意味を掴んだような気がした。これはちょうど、早朝の仕事に取りかかってすぐに訪れた。早朝の仕事の開始とともに、ベートーヴェンの『告別』というピアノ曲を流した。すると、そういえばこの曲には、三つの楽章があり、それぞれには、何か自分を捉えて離さないような意味が込められたタイトルが付されていることに対して、以前から気になっていた。

それらは、最初の楽章から順番に、「告別」「不在」「再会」というものである。このタイトルが醸し出す妖気に引き込まれるような感覚を持ちながらも、その中に完全に入り込んでいないような、中途半端な感覚が私の中にあった。そうした中途半端さから、当初はこれらのタイトルをそれぞれ、私が社会へ別れを告げ、私という存在が社会の中で不在となり、そこから何とか社会との再会を果たしたいという、自分の思いを象徴しているかのように思えた。

それらの意味はおそらくある程度正しいように思えるが、私がこの曲から得ていた感覚を十分に説明していないと思った。確かに、今私が向かわされている個としての究極点に辿り着くためには、ある種、社会との決別が不可欠であり、社会の中で不在の時期を過ごさなければならないように思える。また、個としての究極点から普遍性に至り、そこで得られたものを社会に還元していくために、社会と再会することは極めて重要だと思っている。一人の人間が個というものを獲得し、小さな自己からの解放を通じて、再び社会の中で生きる状態に至るとするのは、人間の発達プロセスの古典的な原理のようなものである。

今の私も一人の人間として、間違いなくそのプロセスの線上を確かに歩いているという実存的な実感がある。ただし、このプロセスを歩んでいるという実感と若干異なるものが、一昨日の就寝前に体験され、その体験がベートーヴェンの『告別』という曲に共鳴していたのだ、と思うに至った。以前の日記で書き留めていたのと同じように、一昨日も、完全にこの自己が認識世界から消滅するという体験とぶつかった。私が私だと思っている自己にまつわるありとあらゆる情報が、一瞬にして消え去る感覚であり、それは自己を構成する過去の全ての歴史が抹消されるような感覚である。

この感覚に包まれる時、そこには静寂しかない。あるいは、無しかないと言っても良いだろう。この状態がしばらく続くと、突如として我に帰るのである。このような体験を一昨日もした。どうやら自我を司る発達プロセスにおいて、強固な自己を確立した後には待っているのは、自己との別れなのだと再認識させられる。

そして、自己との別れの後に、自己の不在が始まり、そこから再び自己に戻ってくるという、一連の微小な発達サイクルをその時に体験したのだと思われた。とりわけ、自己が不在の無の境地から、帰還を果たし、小さな再創造が自分の中で起こっているという感覚を見逃すわけにはいかなかった。この現象は、私にとって未だ謎が多いが、少しずつこの現象の意味が見え始めている。そして何よ

り、この経験は確かに周期的に私に知覚されるものなのだが、奇妙なものでも珍しいものでもなく、実際は、いついかなる時においても、自分の中で密かに進行している現象なのだと感じてきたのである。

自己への告別、自己の不在、自己との再会というのは、何もある特定の時に生じているのではなく、絶えず私の中で生じていることなのだ。この日記を書いている間にも生じていた現象であり、日記を書き終えた今この瞬間にも生じている現象なのだ。2017/2/25

779. 孔子とダーウィン

昨日、中国人の友人であるシェンの自宅で夕食を共にした。その時に、中国の思想家の一連の作品に関する話題となった。最初の話題に取り上げたのは、孔子の作品についてであった。過去の義務教育課程やその後の人生の中で、孔子が残した作品については名前だけ知っているものがいくつかある。だが、シェンが中国語のウェブサイトを通じて教えてくれた情報によると、これまで聞いたこともないような—漢字として視覚的に認識したことがないような—作品がいくつかあることに気づかされた。

一つ印象に残っているのは、孔子が複数の漢字を数珠のようにつなげたシンボルだった。シェン曰く、この数珠のように連なった漢字のどこから出発しても、それが一つの新たな詩になるということだった。これは大変面白く思った。思い出す限り、このシンボルは20個近い漢字で構成されており、どの文字から読み始めるかによって、20パターンの異なる意味の詩が作り出されるとのことである。曼荼羅とはまた異なる深い意味を持ったシンボルだと思わざるをえなかった。

それにしても、文字を一つずらすだけで、新たな意味を持つ詩を生み出すことができた孔子の詩作能力には、ただただ感服するだけであった。孔子がこのようなシンボルを残していたというのは、私にとって新たな発見であり、孔子に対する関心をさらに掻き立てるには十分であった。そのようなことを思いながら、今日は午後から“Handbook of Creativity (1999)”という書籍に目を通していった。これは昨年私がケンブリッジ大学を訪問した時に、ケンブリッジ大学出版の直営書店で購入したものである。

購入後、自分の関心のある章を中心に目を通し、いくつかの書き込みがしてある。今日、もう一度この書籍を読んでおこうと思ったきっかけは、先日の「創造性と組織のイノベーション」のクラスで、エリック・リーツェル教授が教壇にこの本を置いていたことである。その書籍を目にした時、自分の書斎の本棚が想起され、その本が本棚のどこに置かれているのかをすぐさま思い出すことができた。そういえば、二週間前に知人が私の家に来た時、この書籍について少しばかり話をしていたのをふと思い出したのだ。

そのような経緯を経て、本日この書籍を改めて読んでみることになったのである。細かな話を避けると、本書のある章において、ダーウィンの世界観の変遷過程が取り上げられていた。それを見て、私は静かな気持ちになった。ダーウィンがベートル号に乗船して以降の六年間において、ダーウィンの世界観が静かに質的な変容を遂げていることに神妙な気持ちになったのだ。

ダーウィンの中の知識体系が、彼自身が探究対象とした生物のように、ある種の生き物として進化していく様子を目撃したのである。神妙な気持ちの中、やはりダーウィンから励まされるようなものがあつたとも言える。彼の世界観や知識の体系が質的な変貌を遂げているのを目撃したのと同時に、その初期の世界観や体系というのは、晩年のそれらと比べてみると未成熟なのだ。そうした未成熟の世界観や体系が徐々に脱皮し、再構築されていった結果として、ダーウィンの晩年の思想体系というものが出来上がったのである。

また、ダーウィン自身が複数の領域の中に絶えず身を置いていたということも、私にとっては嬉しい発見であつた。一つ一つの領域の中ですでに積み重ねられたものを理解する作業がなければ、その領域に真に新たな知見を加えることは難しい。だが、一つ一つの領域ですでに構築された体系を習得することですら難しいにもかかわらず、複数の領域を同時に探究することは、とても無謀な試みなのではないかと思う自分がどこかにいたのは確かである。しかし、私は複数の領域を同時に探究することなしには、もはや前に進めないような状況に置かれているように思う。

そうした最中、ダーウィンが同じような生き方を強く推進していたことに励まされるものがあつたのだ。こうした生き方は、ダーウィン以外にも、発達心理学に多大な功績を残したジャン・ピアジェも生涯にわたって貫いていたことを思い出す。過去の巨人たちから、私はいつも多大な支援を受けている。

2017/2/25

【追記】

一つの領域に留まらずに多様な領域の中に身を置いて探究を進めることは、私の自然な在り方となった。欧州での二年目の生活から作曲が新たな実践領域に加わり、実務に関しても研究に関しても携わる領域は拡張していく一方である。ただし、私の中の主題そのものは変わらない。人間個人と集合の発達現象が私の主題であることになんら変わりはないのである。さらには、人はいかように自らの固有の生を深く生きることができるのか、いかように日々を充実した形で生きることができるのか、ということも私の中にある変わらない主題である。

こうした根幹的な主題は一貫しており、それらにアプローチしていくために多様な領域の力が必要になる。人は本質的に複雑な存在であり、人から紡ぎ出される人生はさらに複雑である。こうした複雑な対象を探究していくためには、どうしても単一の領域に依存してはならないのである。であるがゆえに、自分の探究が進めば進むほどに他の領域の力を借りる必要性が生まれてくるというのはとても納得できることなのだ。ワルシャワ:2018/4/15(日)21:08

780. 知識の体系

このところ毎日就寝前に、自分の内側に知識の体系が着実に構築されていることを確認するようなど行っている。これは意識的に取り組もうと思ったのではなく、寝室に入った途端に、無意識的にそのような確認を促すような何かが発動するのである。それはまるで、就寝前の祈りにも似た儀式のようである。自分の内側に知識の体系が着実に構築されることを祈るというのも、少しばかり滑稽に映るかもしれない。

だが、今の私にとって、確固とした知識の体系がなければ、研究や仕事にならないのだ。ここで述べている知識の体系とは、単なる情報の集積体では全くない。哲学や思想と同様に、何らかの探究項目を教養的な知識として学ぶことはほとんど意味がないと思う。そのようにして獲得された知識は、内側の眼を曇らせ、内側の感覚を濁らせるような余分な贅肉である。

とにかく、自分が対象とする探究領域の知識を、自分の内側をくぐらせる形で掴み取っていく必要がある。知識を血肉化させることを超えて、もはやそれが存在の一部になるまで、知識というものを自分の内側に浸透させていかなければならない。そうしたプロセスを経て初めて、知識の体系が研

究や仕事という実用に足るものになっていこう。特に昨夜は、自分がどのような領域に関する知識体系を構築していきたいと思っているのか、またその必要があるのかを頭の中で確認していた。

すると、文字通り、頭の中に探究領域ごとの知識の体系が建築物のように浮かび上がってきた。それらの建築物を見ると、どれもが高さや強度のないものであり、それらの度合いも建築物によってまばらであった。しかし、自分の中で、どの探究領域をどのように開拓していくかは、もはや明確になっている。最終的にどのような建築物が出来上がるのかは完全に未知であるが、手作業で一つ一つ建築物をさらに高度なものにしていこうという気概がある。

今日も午前中から、その実現に向けた仕事に取り掛かりたいと思う。ダイナミックシステム理論に関する学びを深めること、古典的な発達心理学の専門書を読み進めていくこと、非線形ダイナミクスの手法の背後にある数学理論を学んでいくこと、当面はそれらが主たる探究項目になるだろう。2017/2/26